

「私は信じます。命あるものの地で主の恵みを見ることを」と、かつて私への励ましとしてこの御言葉を語ってくれた人がおりました。そして、この日の私たちと同じように、恐らくは、その方の遺影もある教会の礼拝堂に置かれていることと思います。そして、そのことを思い、はっと気づかされたのです。命あるものの地で主の恵みを見ている者、それがまさにこの日の私たちであるということ。それは、御言葉が「見る」とはつきり語っているように、主の恵みとは直接的に経験されるものであり、そして、その機会を私たちに与えてくれたのが礼拝堂の側面に置かれている、在りし日の愛する兄弟姉妹であるからです。このことはつまり、神様の恵みは、自分一人で掴み取るものではないということです。それゆえ、この大切な方々の在りし日の姿を通して、この日、私たちは神様の恵みを見て確かめているのは間違いありません。ただ、だからといって、遺影が私たちに直接何かを語りかけることはありません。しかし、それにも関わらず、私たちの瞼の奥に鮮明に刻まれた愛する方たちが、その在りし日の姿を通して私たちに何かをかつてしているようにも思うのです。それは、私たちの人生とその人たちの人生とがそれだけ深く繋がり、また重なり合っているからであるのでしょう。ですから、召された方々は今も私たちに何かを語り続けておられるのは間違いありませんが、けれども、このことはまた、だから、私たちの人生に終わりが無いということではありません。

アブラハム、イサク、ヤコブ、そして、ヨセフと続いた父祖たちの人生にも終わりがあのように、私たちの人生もまたやがて必ずどこかで終わりが迎えるものです。今日の御言葉は、数奇な運命に翻弄されたヨセフのその人生の最期を記すものでもあります。そこで私たちが知らされることは、その終わりが穏やかに祝福されたものであったということ

です。それは、ヨセフ自らがその死を自然のこととして受け入れ、また、大勢の人々もまたその死を同じように自然なものとして受け入れているからです。そして、そのことに加えて、ヨセフが110歳という長寿であったこともその理由の一つとして挙げることができるのかも知れませんが、しかし、ヨセフの生涯が祝福されたものであったと言えるのは、ヨセフが単に長生きであったからではありません。御言葉はイスラエルの父祖、アブラハムの死に際し、「アブラハムは長寿を全うして息を引き取り、満ち足りて死に、先祖の列に加えられた」と語るのですが、そこでの強調点は、アブラハムが長生きしたということではなく、生を全うして死んだということです。つまり、神様によって測り与えられた命を使い果たして最期を迎えたということ、つまり、この全うし、使い果たしたところに現されるものが神様の祝福であり、従って、この祝福こそが私たちに与えられている命の本質であり、また、それが神様の御旨であるということです。

ですから、そういう意味で御言葉は神様の祝福を量的に推し量ることはしていません。つまり、単純に長いか短いかで命の祝福度合いを測るのではなく、神様が与えられたものを使い果たして死を迎える、祝福された人生とは、この使い果たすところに表されるものだということです。そこで、それと似たような話を思い出しますが、民俗学者の宮本常一さんのお母様は、本当に何も残すことなく、ものの見事にすべてを使い果たして亡くなったのだそうですが、そのことを宮本さんは見事だと仰っておりました。それは、一銭も残さずにすべてを使い果たすことがどれだけ難しいことかを知っていたからでもあります。なぜなら、多くの場合、使い果たそうとしても、それは足りないか余るか、いずれにせよ、ぴったりと上手くいくことはないからです。そして、それがまた私たちの人生なのかもしれません。それゆえ、今日の御

言葉が語るように、そこには言うに言われぬものが多少残されることにもなるのでしょう。けれども、ヨセフ然り、在りし日の姿をとどめる私たちの目の前にある方々然り、それにも関わらず、私たちの知る多くの人々は、命を使い果たし、祝された人生を歩んだと言ってもいいのでしょう。従って、人生を使い果たし、神様の祝福に与るということは、ある特殊な人たちに限ったことではありません。なぜなら、人の命とはそのように神様の祝福にあずかるべく与えられているものでもあるからです。それゆえ、生の充足の後に死が訪れる、このように祝福された生と深く結びあわされた形で備えられているものが、私たちが死と呼んでいるものでもあるのですが、それゆえ、死が人の生を規定して、ああたこうだと評価することはありません。つまり、この日の御言葉が語ることは、死が生の向こう側に立って敵対するものではなく、人生に対して成就という徴を押しものであるということです。従って、この日の御言葉が私たちに伝えてくれていることは、人の命とは、このヨセフと変わらぬ有り様であるということです。ですから、今日の聖書の御言葉に聞いていくなれば、本質的に死は決して悪いものではありません。私たちが祝福されたその生涯を歩む中でいずれ必ず辿り着くその先が死であり、このように、死には、私たちがこうして終わりに至ったとの明確な理由が与えられているからです。

ところが、私たちはこの死というものをその視点だけで見つめるわけではありません。本来は一つであるはずのこの生と死を、死だけを取り上げて受け止め、殊の外、恐れるものでもあるからです。ですから、御言葉は、そんな私たちの気持ちを次のように記します。「御顔を隠されれば彼らは恐れ、息吹を取り上げられれば彼らは息絶え、元に塵に戻る」と、本来の命の有り様とはまったく正反対の受け止め方をする、そんな私たちの姿を記すのです。それは、私たちの命には、私たち人間の罪の問題、いわゆる、原罪と言われている私たちには抗うことのできない現実が付きまとっているからです。それゆえ、この罪が私たちの人生のあらゆる所で顔を覗かせて、私たちを

精神的にも肉体的にも追い詰めることになるのです。こうして、死は、私たちの内側で祝福のしるしではなく、罪のしるしへとその姿形を変えることにもなるのですが、そして、大勢の家族に看取られながら召されていったヨセフの生涯もその例外ではありませんでした。その数奇な運命から見ても明らかなように、その家族各々の罪ゆえに、ヨセフ始めその家族の人生は大きく狂わされることになったからです。

ですから、私たちの願いからすれば、そうした人間の不幸に抗うべきなのが神様だとも言えるのでしょう。けれども、ヨセフとその家族の歩みを見ていく限り、神様はそうしたものにまったく抗おうともしていません。それゆえ、ヨセフ一家が味わった罪の結果としての数々の試練は、神様の冷酷な一面を現しているとも言えるのでしょうし、また、死はその延長線上に置かれたものだとも言えるのでしょう。それは、気まぐれとしか思えない神様の御心が私たちに死の現実を突然突きつけることがあるからです。ですから、死には、このように、こうして・終わりに・至った、という別の理由が与えられているともいえるのですが、では、御言葉が語る真実と、罪の現実に生きる私たちが感じるころとの違いは一体どこから出てくるものなのでしょう。それを知るには、ヨセフとその家族のこの最後のこの瞬間だけを切り取るだけでは不十分です。今日は長くなりますので読みませんが、今日の直前の箇所を見ても分かるように、和解したはずのヨセフとその兄弟との関係性は今日の直前まで完全な形で修復されることはありませんでした。罪の問題はそれほどまでに根深く、人の心を本来のものから遠ざけようとするものであるからです。では、ヨセフ始め、イスラエルの人々に暗い影を落とすこの罪の現実、ヨセフの臨終の場面において完全に切り除かれることになったのでしょうか。それは、「ヨセフは父の家族と共にエジプトに住み」とあり、また、死に行こうとしているヨセフが「私は間もなく死にます。しかし、神は必ずあなたたちを顧みてくださり、この国からアブラハム、イサク、ヤコブに誓われた土地に導き上げてくだ

さいます」と、御言葉がこのように語っているように、この家族を苦しめる要因は、その罪ゆえに残されたままであるのです。しかし、それにも関わらず、このヨセフの最期には明るい光が注がれている、私たちがこの場面から感じることは、この明るさと穏やかさでもありますが、けれども、その一方で、そこに影が差していることを聖書の御言葉は誤魔化そうとはしていないのです。

ヨセフの最期が穏やかであるのは、ヨセフが格別に信仰深い人生を歩んだからではありません。創世記37章から始まるヨセフ物語には、神の家族の置かれた複雑な事情が記されていますが、当然のことながら、そのほとんどが私たちが抱く信仰のイメージとはほど遠いものばかりです。それゆえ、この破綻した関係性はいつどこで終わっても不思議ではありませんし、物語の途中だけを切り取ってみるならば、関係性は完全に終わったとさえ言えるのです。このように、その命運がいつ尽きても不思議ではないのがこのヨセフの家族でもあります。けれども、それにも関わらず、ヨセフの家族は、はっきりとした一つのまとまりをもってヨセフの死という、この祝された時を分かち合っているのです。なぜなら、人の生と死というものが、それがどんなに汚く醜いものであったとしても、それぞれは切り離されることがないからです。つまり、どのような命も、神様が人に息を吹き入れ与えられたものである以上、命は神様に属するものであり、それゆえ、神様に祝福されたものとなるということです。従って、人の生と死を結び合わせるものは人の罪ではありません。ヨセフの生涯を通して私たちが知るところはそのことであり、ですから、ヨセフは、ヨセフに対して犯した自らの過ち、その罪に恐れおののく兄弟たちに向かってこう言っています。「恐れることはありません。私が神に変わることができましようか。あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変えて、多くの民の命を救いために、今日のようにしてくださったのです」と、このように語るのですが、それは、あらゆる命、すべての命は、神が造られ、生きる者とされた以上、すべてが神様の御手の

中に置かれているのであり、それゆえ、その罪ゆえに犯す様々な過ちによって、その命が本質的にも根本的にも汚されることはないからです。ですから、聖書が、命を生と死という形で分けて捉えていないのはそれゆえのことでもあるのです。

このように、神様の御手の中に置かれていたのがヨセフの生涯であり、そして、それがイスラエルの人々の生涯でもあるのです。だから、ヨセフは、その臨終の際に、残されるその家族に向かって「神は、必ずあなたたちを顧みてくださいます。そのときには、私の骨をここから携えて上ってください」とこう誓わせているのです。それは、ヨセフのこの言葉が示すように、生と死とは切りなされたものでなく、それゆえにまた、神様によって生きるものとされた私たちの関係性も主という神様との関係性で捉え直すことができるなら、それは神様の恵みという点で尽きることもなく、また終わることもない、御言葉がここで語ることはそう言うことでもあるのです。従って、神様の御手の中に置かれたあらゆる人々の命、こうして御言葉に聞いている私たちの命は、個々バラバラに切り離された形で捉えるものではありません。つまり、ヨセフのこの最期の箇所から分かることは、神の御手の中に置かれた命とは、その人一人だけのものではなく、共同体、交わり全体と関わり合うものであり、それゆえ、神様の御心の中に置かれあらゆる命、すべての命は、神様の光の中を生き、そして、その命を生きればこそ、命はその後もなお続くことが約束されるのです。まただから、「神は必ずあなたたちを顧みてくださる」とヨセフは語るものであり、ですから、その同じ言葉をヨセフがイスラエルの人々に誓わせたのはそれゆえのことでもありました。それは、神の顧みなくして、その命運がいつ尽きてもおかしくないことを、ヨセフはその生涯を通じて知らされたからであり、そして、このことはまた、逆に捉えるならば、神様の顧みがあればこそ、私たちは何があっても大丈夫なのです。そして、それが確かな形で与えられているのが、私たちが今こうして集められている教会という共同体、交わりでもあるの

です。なぜなら、ヨセフとその家族以上に、このことを明確に知らされているのが、この日、この場所に集められている私たちであるからです。

「あなたは私の魂を陰府に渡すことなく、あなたの慈しみ生きる者に墓穴を見させず、命の道を教えてください。私は御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い、右の御手から永遠の喜びをいただきます」と御言葉はこう語るのですが、そこで、「墓穴を見させず」と、また、「御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い」と、そして、この相反する事柄を繋ぐかのように「命の道を教えてください」と語るように、それぞれに背を向け合っている現実を繋ぐのが私たちの神様であり、そして、そこで与えられるものが私たちの信仰でもあるのです。ですから、在りし日の姿を止める方々はこの信仰に生きた方々であり、それゆえ、矛盾のただ中に置かれながらも、なお、神様の祝福に与りながら歩んだとも言えるのです。しかし、私たちの考えや思いからすれば、これらの人々と近いところに生きたがゆえに、私たちはまた別の評価を下したりもするのでしょうか。それは、そもそものところで言えば、在りし日の姿を止める方々のすべてが信仰を我がものとしてその生涯を生きたわけではないからです。けれども、仮にそうであったとしても、直ぐ近くで共に歩んだ私たちであるからこそ、そこで一つだけはっきりと言えることがあります。

矛盾を抱えつつ生きねばならないのが私たちの人生であり、そして、在りし日の姿を止める方々もまた、もしかしたら、時に矛盾の原因となることもあったのでしょうか。けれども、どういう形であれ、その人々は間違いなく私たちの祈りの内に置かれた人々でもありました。それは、信仰を持っているかいないかに関わらず、私たちがこうして共に生きている以上、常に、何が何でも、神様の御前に置かずにはいられない人々であったからです。そして、それは、ヨセフが自らを苦境に立たせたその兄たちを殺さんばかりに呪ったように、まさに矛盾を抱えながら、なお生き続けなければならないのが私たちであり、そして、この現実がまた私たちをしてそうさせることにもな

るからです。それゆえ、ヨセフ然り、また私たち然り、絶望が支配する中を歩み続けるためには祈りを欠かすことはできません。それゆえ、祈り信仰が与えられている私たちは祈りつつ歩み続けることにもなるのですが、そして、そこで間違いなく言えることは、私たちだけでなく、在りし日の姿を止める人々もまた、そんな私たちのために常に、何が何でも、是が非でも祈ってくれた人たちであったということです。ですから、私たちの信仰は、そういう意味では好奇心に駆られた知的作業でもなく、また、自らを浄化するがごとく善行にただひたすら励むことでもありません。この矛盾のただ中をただ生きるということ、ただ行き続けるということ、それゆえにまた、祈らずにはいられないということでもあるのです。ですから、私たちの信仰とは、まさにそういう状況の中で成り立っているものであり、そこに在りし日の姿を止める人々と同じように共々に過ごしてきたのがこの時御言葉に聞いている私たちでもあるのです。そして、その私たちが見つけていたものはそれだけではありません。ヨセフとその家族が見ることのなかった大事なお方を、イエス・キリストというお方の姿を祈りの内に間違いなく見てきたのが私たちでもあるのです。まただから、イエス様も「人はパンだけに生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と、申命記で語られている聖書が私たちに伝えるこの大切な真実を私たちに伝えてくださったのです。それは、イエス様と共に、イエス様と同じように、神の御声に聞き、また、神様の恵みを見つめているのが私たちであるからです。ですから、このイエス様に導かれる私たちの関わりは、命の本質が生と死によって分けられるものではないように、イエス様の再臨を待ち望む私たちにとっては、これからも変わらずに続いていくことでもあるのです。ですから、祈りの内に神様の御声に聞き、神様の恵みを共々に分かち合いながら、その日を待ち望む私たちでありたいと思います。祈りましょう。